

荒れのきざしのみられる学級集団との1年間

～『クラスはよみがえる』を基本としたクラス経営～

山本卓也 (岡山)

要旨：以前、学級集団アセスメント「hyper-QU」で「荒れのきざしのみられる学級集団」と判定されたクラスがありました。確かに学級開き当初よりクラス全体に人間関係の希薄さや将来への目標意識の低さ、クラス全体が緊張状態にあるかのようなピリピリとした雰囲気悪さも感じていました。そしてクラスの中にはいじめの問題も存在していました。そこで私は『クラスはよみがえる』(野田俊作、萩昌子著)に書かれているように、生徒一人一人が抱えている問題をクラス全体の問題であると捉え、あえて一人一人に細かく指導をするのではなく、指導のほとんどをクラス全体に対して行い続けるというアプローチを行いました。その結果、時間はかかりましたが生徒同士のトラブルが解消され、クラスも徐々に良い雰囲気となり、4月当初とは違った形で3学期の最終日を迎えることができました。今回は1年間のクラスへの働きかけを中心として、二名の生徒に対する取組を報告します。尚、今事例の報告について生徒および保護者の承諾は得ておりますが、事例の内容上、名前等はふせております。

キーワード：アドラー心理学、クラス経営、クラスはよみがえる、教育共同体、学級活動

1. クラスのようす (男子17名、女子16名 計33名)

(1) 始業式から5月初旬あたりまで

特に問題行動を起こすという訳ではありませんでしたが、アイスブレイクを行っても、係や委員を決める話し合い活動を行ってみても、どこかしらけた雰囲気で、グループを作ってみても毎回決まったメンバーで固定化されており、そこから人間関係が広がっていく様子は感じられませんでした。そして5月下旬に「hyper-QU」を実施した結果、「荒れのきざしのみられる学級集団」という分析結果が出ました。

(2) 2人の生徒間トラブル

本事例では2人の生徒のトラブルも大きな課題でした。仮に被害者生徒をA、加害者生徒をBとします。AとBは同じ部活動に在籍しており、前年度からのトラブルが解消されておらず、親も含めてかなりの揉め事になっていました。そしてこの2人のトラブルに関して十分な情報が得られないままクラス編成が行われ、2人が同じクラスになりました。

4月当初は特に問題は無く無難に過ぎているように思えましたが、5月下旬、Aの母親から担任に「子どもが学校でいじめられているようだ」という電話が入りました。担任が放課後Aを呼んで事情を聞き、そこで初めて部活動で起こっていたトラブルが解消されず、そのまま同じクラスになっていたという事実を知ることとなりました。はじめはAもBに何かされるとやり返すな

どしていたようですが、やがてBだけでなくその周囲からの嫌がらせや悪口などが続き、Aは学校に来るのがつらい状況の中、何とかがんばって登校していました。

2. クラスの状況と対応策

(1) クラスのようす

先ほども述べたように、「hyper-QU」という標準化された心理テストにより、「荒れのきざしのみられる学級集団」と判定されました。「hyper-QU」についての内容の詳細については、本論末の参考文献（河村茂雄著：学級づくりのためのQ-U入門 図書文化社、2006）を参照いただきたいのですが、簡単に説明するとクラスの状態を「ルール」と「リレーション」がクラスでどの程度確立できているのかよって、「満足型」、「管理型」、「ゆるみ型」、「荒れはじめ型」、「分散型」、「崩壊型」の何れかのパターンで判定が出て、それを元に担任はクラス経営を見直して対処していくというものです。この「ルール」と「リレーション」という視点はアドラー心理学を基にした子育てプログラム、『パセージ』の中の子育てにおける行動面の目標、「自立する」、「社会と調和して暮らす」、また心理面の目標、「私は能力がある」、「人々は仲間だ」という考え方に非常に近いと思います。なぜなら、自立した人間は社会のルールやマナーについて積極的に守れるであろうし、リレーションの確立されたクラスでは、生徒は「クラスメートは仲間だ」と思えるであろうと思うからです。そこから考えると、クラスの現状は「私は能力があつて、人々は仲間だ」と思っている生徒が少ない状況であるということが分かりました。クラス全体的に勇気がくじかれた状況であると考えました。

(2) クラス経営を考える

このような状況のクラスを1年間どのように運営していくかと考え、『クラスはよみがえる』を基に対策を考えました。

①クラスの構造に問題があるというスタンス

今回のクラスには当初からいじめの問題がありました。『クラスはよみがえる』の中では、いじめ問題への対応策として、いじめ問題を加害者、被害者の問題ではなく、クラスの構造の問題として対処にあたるべきとあり、それを常に念頭に置くことを忘れないようにしました。

②教師の姿勢

『クラスはよみがえる』の中に、「教師は（中略）クラスの中に子どもたちが相互に援助しあうような環境を作ればよいのです。（中略）全責任をかぶるボスであることをやめて、クラスのコーディネーターに徹すればよいのです」と書かれていて、「教育共同体」という考え方を提唱しています。教師がコーディネーターとしてのスタンスでクラスを運営することによって、クラスに民主的な秩序を作ることの重要性を説いています。そのために担任は著書の中にある「クラス集団への5つのべからず」をもう一度確認しました。

- 競争させない
- 君臨しない
- 統治しない
- 裁判しない
- 悪平等、全体主義に陥らない

③生徒へのアプローチの仕方

生徒への接し方についても『クラスはよみがえる』中の「子どもへのアプローチ7つのべからず」を確認し、アプローチの指針にしました。

- 子どもを敵にまわさない
- 子どもを恐怖心で動かさない
- 解決をあせらない
- ほめない、叱らない
- 命令しない
- 意見と事実を混同しない
- 必要以上に干渉しない

(3) 互いに協力しあう場の設定

『クラスはよみがえる』では、互いに協力しあう場の設定に「クラス議会」を推奨していますが、学活などの特別活動や道徳などではすでに年間計画がでており、すべき内容は学年で統一されていました。また、帰りの会の時間を伸ばすことも、放課後には部活動が控えているため実施しにくい状況でした。そのため、帰りの会の中に活動を入れること、特別活動の最初の5分～10分で行えるような活動を選び、それを年間を通して行うように設定しました。実際の取組を以下に紹介します。

①帰りの会での取組み（年間を通じて）

帰りの会は15分間で行われています。その中でプリント学習をし、その後、1日の振り返り、明日の予定などを連絡して終了となります。今回はこの15分間に工夫をして帰りの会を行いました。マンネリ化を防ぐために、少しずつ取組み内容を変更しながら行いました。主な流れは以下の通りです。ネタについては後述しますが、帰りの会（1）、（2）では班内でお互いが打ち解けあえるようにするため、始まりを班机にして始めることにしました。（3）では一斉授業隊形でのスタートにしていますが、これは年度末の3月から行いました。理由は4月になるとクラスの再編が行われ、新たな担任の下での生活が始まるので従来の帰りの会の状態に慣れてもらうためです。

●帰りの会の流れ（1）

☆ 班机になって始める

①プリント学習（6分）

※回収・提出まで含めて

②班でのトーク（5分） 班長が司会

③今日の“ちょっといい人”さがし（2分）

④司会は前へ、机を元に戻す

⑤帰りの会（2分）

※タイムキーパーは週番の班長がする。

●帰りの会の流れ（2）

☆ 班机になって始める

①プリント学習（6分）

※回収・提出まで含めて

②チェック表記入（5分）

③今日の“ちょっといい人”さがし（2分）

④司会は前へ、机を元に戻す

⑤帰りの会（2分）

※タイムキーパーは週番の班長がする。

●帰りの会の流れ（3）

☆ 授業机になって始める

①プリント学習（6分）

※回収・提出まで含めて

②チェック表記入（3分）

③1分間スピーチ（2人ずつ）（3分）

④帰りの会（3分）

※タイムキーパーは週番の班長がする。

○チェック表（ストロークチェック）について

ストロークチェック表については少しずつクラスが打ち解けあってきたなと感じた1月位から取り組みました。内容は「言葉がけ（あいさつ）チェック表」というものを作り、その日1日、クラスのだれと言葉を交わしたのかを振り返るようにしました。始める前には、「全員と言葉を交わしなさいという事ではないから安心して下さい。もし『明日はこの子にあいさつしてみようかな』なんて思ったらぜひ声をかけてみて下さい。せっかくの縁で一緒になったクラスメートだからね」という話をしました。これも思ったより奏功して、チェックを増やすために、帰りの会間際になって慌てて声を掛け合う生徒の姿も見られるようになりました。

○今日のちょっといい人探し

これは生徒が毎日提出する「生活ノート」に担任が1人だけシールを貼って返します。それを受け取った生徒は次の日に一回だけクラスのために何か良いことを、こっそりします。それを帰りの会でみんなで推理し、見つければみんなの勝ち、見つからなければその子の勝ちというルールにして行いました。1人がクラスに貢献し、それをみんなが注目するということをねらった取り組みでした。結構盛り上がりました。

○トークのネタ

トークのネタについては以下のような内容で取り組みました。トークのネタは曜日で変えることにしました。特に盛り上がっていたのは、「今週のマイベスト給食」と「ちょっと怖い話」で、給食の細かな内容まではっきりと覚えている生徒や、本当に震えあがるような怪談をする生徒もいました。

トークのネタ(1)

月…おすすめの本・TV・映画等

火…ありがとうさがし

水…今日1番がんばった授業

木…ありがとうさがし

金…今週のマイベスト給食

トークのネタ(2)

月…今週楽しみな授業・行事

火…ちょっと怖い話

水…ちょっといい話

木…ちょっと知ったかぶりの話

②授業、学級活動、道徳、総合学習などでの取組み（年間を通じて）

○ミニゲーム

これについては、教室で使えるミニゲームのネタ集のような本がたくさん出版されており、それを参考にしましたが、その中でも生徒に人気だったのは「プロジェクトアドベンチャー」系のゲームでした。

○感謝の輪

ジェーン・ネルセン著「Positive discipline in the classroom」ではクラス経営の方法として「クラス会議」を推奨しています。本来ならば手法の全てを取り入れたいところでしたが当時のクラスのように、また hyper-QU の分析結果によるとグループで何かをやるにはまだ難しいという結果でしたので、クラス会議の初めにやる「コンプリメントと感謝の意を伝える」というワークを取り入れて行いました。実際には「感謝の輪」という題名をつけました。手順については、

①クラス全員が教室の前半分に輪になって座る。

②隣の人に感謝の言葉を言ってトーキングスティックを渡す。

「教科書を見せてくれてありがとう」

「消しゴムを拾ってくれてありがとう」など

③感謝の言葉を言われた人は、言ってくれた人に向かって「ありがとうと言ってくれてありがとう」と言う。

④1周するまで繰り返す。

といたって簡単ですが、これも効果があり照れながらも嬉しそうにする生徒がたくさんいました。

○個々の協力に感謝する

人間関係が希薄なクラスであっても、個々には生活の中でクラスに貢献したり、友人や教師に貢献する生徒はいます。そんな時は、極力その場で生徒自身に直接伝わるように「ありがとう」などの感謝の言葉を伝えるようにしました。帰りの会など公の場面でフィードバックするという考えましたが、クラスの間関係が希薄な状態では不安もあり、一人一人にきちんと伝わる形で、貢献的な行動に感謝し、注目するようにしました。

(4) クラスのその後

ここまで紹介した取組みを年間通して継続していきました。その結果、徐々にクラスの雰囲気は変わっていき、生徒同士のつながりも徐々に増えていき、3月の修了式のときには、「もう1年、このクラスで過ごしたい」という生徒の声が多く聞かれるようになっていました。

3. 2人の生徒への関わり方（被害生徒：A、加害生徒：B）

(1) 1学期

AとBのトラブルが分かった後、両方から事情を聴きました。出てきたのは、お互いされて嫌だったことや、相手の悪いところなどネガティブな内容ばかりでした。Aは「とにかくやめて欲しい」。Bからは「Aもこんなことを自分にしてきた」などと訴え、水掛け論になっていました。

そこでAにはいじめの件で担任から話を持ちかけることは極力しませんでした。私の方から話しかけるのはもっぱら雑談のみ。幸いにもAは生き物に興味があり、その点で担任とも楽しく会話することができたので、飼っている動物や昆虫の話をしました。ただ、加害生徒への不平や不満を言うてくることがありましたので、その時は「うん。うん」と聞き役に徹し、十分聞いた後、「今何か先生にできることある？」と問いかけるようにしました。この問いに対してAはいつも「注意して下さい」と言ってきたので、「分かりました」と答え、Bには「～されてすごく嫌な思いをしているみたいだよ」と強圧的にならないように注意しながら伝えるようにしました。ただ、この対応だとAには不満や不信感を抱かれかねないので、その辺りのフォローは他の教員には「Aが相談に来たら乗ってやってください。必要であれば指導していただいても構いませんので」とお願いをして相談や指導に入ってもらっていました。また、その結果その先生がBを指導することがあっても、それを制止することはせず、「よろしくお願いします」と任せるようにしました。それよりも1学期で苦労したのはBとの信頼関係の構築でした。これは後から本人から聞いて分かったことですが、2人のトラブルに関して、Bは一方的な加害者として周囲の大人達（部の顧問や、保護者など）から指導を受けており、担任が雑談をしようと呼ばれただけで、「今度は何を注意されるのか」というような感覚でいたそうです。そうした中で、夏休み前の7月頃になると、Bの方から少しずつ勉強の悩みを語ってくれるようになりました。2学期に向けてBとの関係にはいくらかの希望が見えてきたのですが、不安だったのはこの頃になるとAとの会話が減ってきていたことでした。代わりにAは他クラスの担任や副担任に相談に行くことが増え、休み時間や放課後、他の教員と相談している姿をよく見かけました。

(2) 2学期

AとBの関係はまだまだ緊張状態でした。担任としては1学期同様担任とA、担任とBとの関係作りに重点を置いて取り組みました。その結果、Bは10月中旬ころから明らかに積極的に担任と会話ができるようになり、現在の自分の悩みを色々と話してくれるようになりました。そこで分かったのは、Bには成績優秀な兄妹がいて、いつもそのことで両親、特に父親からきつく当たられており、家ではかなりしんどい思いをして過ごしているということでした。ともあれBとはこの時期に相談の人間関係ができたと思います。しかし、問題もありました。Aとの関係です。やむを得ずという部分もありましたが、Aには担任がBの肩を持っているように映ったのか、家で母親に不満を言い、それを母親が生徒協助手員という地域で学校と協力しながら生徒を見守ってくれている方に相談したようで、その方が心配してくれ、担任に話してくれました。そこで、担任は今の状況でBの指導に入っても問題が更に教師に見えにくい水面下に入ってしまう（SNSなど）怖れがあること、どちらも悪者にせず、敵対するより仲良くなってこのクラスを終わって欲しいことを伝え、できれば保護者の不安を取り除くことに協力をして欲しいと伝えました。協助手員の方は快く引き受けてくれ、その後のAの保護者の相談役になってくれました。この協助手員の方の協力が今回の事例の大きなポイントの一つでした。「担任にはちゃんと考えや思いやがあるから任せてみよう」と伝えてくれたようで、保護者は安心し、Aとも1学期当初のように話す機会が増えてきました。それは2学期も終わりかける12月の初めのことでした。そのころからA、Bからのお互いに対する不満の声もほとんど聞かなくなりました。

(3) 2学期終了間際

ここで2人の関係に大きな転機が訪れます。Bが父親との関係を相談してくることが度々あり、担任もアドバイスを送るようになりました。そしてそれがうまくいくことが何度かあり、家での生活が少し楽になってくることがありました。そうしたある日、Bが「何でAにあんなに嫌なこ

としてしまったんだろう」とポツリとこぼしました。そこで担任が「そうだよね。毎日顔を合わす教室でそんな状態って正直しんどくない？」とこれも思わずつぶやくと、Bはその場に泣き崩れてしまいました。泣き止むのを待って、「本当はどうなりたいの？」と聞くと「もっと普通になりたい」と言いました。そこで担任も号泣しそうになりましたがグッとこらえ、「どうする？もし気まづかったら、先生も入れて3人で話してみる？」と伝え、Aにそのことを伝えると、「話をしたい」とのことだったので、放課後3人で会うことにしました。その席でも担任が驚くことがありました。何もこちらが催促していないにもかかわらず、席に着くとBの方から「今まで本当にごめん」と言いだし、Aも「自分も何か色々やり返したり、陰で悪口言ったりごめん」とお互いが謝罪をし、「これから仲良くしよう」とわずか5分ほどで話がつきました。

(4) 3学期から学年末に向けて

何とか2人の生徒間の問題は解決の方向に向かいました。3学期が始まると、お互い朝の挨拶や休み時間に会話する姿も少しずつ増えてきました。今後、2人の中のトラブルは発生しないだろうと考え、担任からは他のクラスメートと同じような関わり方をするようにし、担任からの関わりを極力減らすようにしていきました。

4. クラスと2人の生徒との関係

当初はクラス全体の人間関係が希薄であったために、特に元々友人の少ない被害生徒Aにはクラス内になかなか仲の良い友人ができませんでした。クラスでの様々な取組を続けたことによって、まずクラス内での人間関係が少しずつ構築され、その中にAも自然と組み込まれていくようになりました。担任は特に誰かにAと仲良くしてやって欲しいとお願いした訳ではありませんが、少しずつクラス内に人間関係ができ、居場所ができていったようです。また、そのことによって人間関係もAとBの1対1の関係ではなくて、AとAの友達とB、BとBの友達とAなどのように間に何人かのクラスメートが関わることにより、AとBはお互いの距離を少しずつ縮めることができたのではないかと考えます。

5. 事例の考察

(1) クラス全体への関わり

当初のクラスの現状は「私は能力があって、人々は仲間だ」と思っている生徒が少ない状況であるということが分かりました。そこで担任はクラスの構造の問題として対応をしていきました。これはアドラー心理学の基本前提の中の社会統合論（対人関係論）にあたり、『クラスはよみがえる』には、クラスという社会から競争原理をなくし協力原理を築くために、旧来の教師と個々の生徒を結ぶだけの扇形の人間関係ではなく、教師も生徒たちと同じ水準に立って、ネットワークに組み込まれる網形の人間関係構造を築くことが必要だと書かれています。本事例では、「クラス集団への5つのべからず」と、「子どもへのアプローチ7つのべからず」を常に意識して取り組んでいくことで、クラスの中で担任がボスや裁判官にならず、生徒たちと横の関係が完全ではないとはいえ築くことができたことで、当初のどこかしらけた雰囲気から脱することができたのではないかと考えます。また、できていないところや不完全なところ、不適切な行動に注目し、注意や指導に力を費やすのではなく人間関係を築くためのワークやレクリエーションを数多く盛

り込むことで、生徒に負の注目を与えることにならなかったのではないかと思います。

(2) 2人の生徒への関わり

今回の事例では、1学期の間はとにかくBに対して「先生は仲間だ」と思ってもらうことが最優先で取り組みました。ここでの信頼関係なしでは次の指導にはつながらないと自分自身に強く言い聞かせながら取り組みました。その際、Aへの対応については担任一人では不十分なのでその点については周囲の教員へ相談をし、協力を依頼しました。お願いした先生方はみなさん快く引き受けてくださり、大きな支えとなりました。その結果2学期以降のBの考えや態度の変容につながり、ひいてはそれがAにとってもプラスに働いたのではないかと考えます。Bに「先生は仲間だ」と思ってもらえたこと、Aに対しては教員同士がAのために自分にできる範囲で関わろうと協力しましたが、その教員間の協力・連携の中にAを巻き込むことができたことが奏功したのではないかと考えます。また、クラス全体へのアプローチとしていわゆる「いじめはいけない」などの説諭を中心に指導を行うのではなく、グループワークやショートレク、アイスブレイクなどの様々な手法を取り入れて人間関係を構築していくという指導に専念することでクラス全体の勇気をくじくことが抑えられ、勇気づけの方向に向かうことができ、そのことでクラス全体が教育共同体に近づくことができ、問題を抱えた生徒も含めて成長できたのではないかと考えます。

6. 結語

今回は、荒れのきざしのみられるクラスと、2人の生徒とのトラブルについて2つを切り離して考えるのではなく、『クラスはよみがえる』の中にある、クラス全体の課題として取り組み、その結果2人のトラブルとクラスの雰囲気がいよい方向に向かった事例を報告しました。最近の教室では、家庭や生徒自身の価値観や考え方も非常に多様化しており、クラス経営も一筋縄ではいなくなっていますが、そんな現在だからこそ、アドラー心理学の需要はますます高くなっていくのではないかと思います。ここで今一度、アドラー心理学によるクラス経営の著書『クラスはよみがえる』をもう一度読み、地道に丁寧に実践していけば、クラスで起こる様々な問題やトラブルに対しても生徒とクラスを勇気づけながら教育を実践するという視点を忘れず教育活動に取り組めるのではないかと思います。

参考文献

- (1) 野田俊作、萩昌子著：クラスはよみがえる。創元社，pp268-270，1999.
- (2) 野田俊作：Passage 1.3. アドラーギルド，10-R, 21-L-24-R，2005.
- (3) 山本卓也、中島弘徳：部活動における勇気づけ。アドレリアン 24(1):pp32-36，2010.
- (4) 河村茂雄著：学級づくりのためのQ-U入門。図書文化社，pp58-59，2006.
- (5) ジェーン・ネルセン、リン・ロット、H・ステファン・グレン著：クラス会議で子どもが変わる。コスモス・ライブラリー，pp53-61，2000.

更新履歴

2021年8月20日 アドレリアン掲載号より転載